

ネヘミヤ記4章「敵の妨害」

1A 軽蔑による落胆 1-6

1B 崩れ落ちる石垣 1-3

2B 復讐を任せる祈り 4-6

2A 敵の陰謀 7-15

1B 祈りによる見張り 7-9

2B 内側から来る恐れ 10-15

3A 目を覚ました工事 16-23

1B 武器携帯の工事 16-20

2B 寝ずの番 21-23

本文

ネヘミヤ記 4 章を開いてください。私たちのネヘミヤ記の学びでは、「神の民の建て上げと戦い」を見て行っています。エズラ記において、バビロンから帰還した民が神殿を再建しました。けれども、エルサレムの城壁が廃墟となっていたので、周囲の住民から恥辱を味わっていました。それを伝え聞いたネヘミヤは、座り込んで、嘆き、断食をして祈りました。彼は、ペルシア王アルタクセルクセスに仕える献酌官でしたが、神がそこで恵みを与えてくださり、一時、彼の故郷にお暇させてもらう許可を得ました。そして、たった一人で夜に城壁を偵察し、その惨状を確認した後、指導者たちを集めて、工事に取り掛かろうと呼びかけました。しかし、周囲の有力者たちが激しく怒っています。

そして私たちは 3 章で、人々がそれぞれ任されたところで城壁再建の工事を進めていったところを見ました。私たち教会が、それぞれ任されたところで主に熱心に仕えることによって、教会は着実に建て上げられるということを学びましたね。私たちは、自分の見えるところだけで物事を考えてしまいます、自分は大きなことをしていないのではないかとか、考えて、何かやらないと！とか考えてしまいますが、要は、目立つところでも、目立たないところでも、それぞれに神が命じられていることを、与えられた賜物を用いることによって、しっかりと務めを果たしていくのです。

1A 軽蔑による落胆 1-6

そして 4 章ですが、私たちは教会の建て上げと守りの中で、最も大事とも言ってもよい、霊の戦いの本質的部分を学べます。いつも指摘していますが、「邪魔や反対が起こる時は、前進していることの証拠」です。イエスを自分の主として受け入れ、信仰を生活を始めた時から、自分は戦いの前線にいることを忘れないでください。なぜなら、サタンに神の御国が入り込んでいるからです。自分がイエス様のものとなったことによって、サタンから自分の魂を神が奪還し、愛する御子の支

配の中に移されたからなのです。ですから、抵抗勢力として何とかして、キリスト者の歩みをやめさせようとするし、教会において、その働きを前進させないように躍起になります。

1B 崩れ落ちる石垣 1-3

1 サンバラテは私たちが城壁を築き直していることを聞くと、怒り、非常に憤慨して、ユダヤ人たちを嘲った。2 彼はその同胞とサマリアの有力者たちの前で行った。「この哀れなユダヤ人たちは、いったい何をしているのか。あれを修復して、いけにえを献げようというのか。一日で仕上げようというのか。焼けてしまった石を瓦礫の山の中から拾って、生き返らせようというのか。」3 彼のそばには、アンモン人トビヤがいて、彼も「彼らが築き直している城壁など、狐が一匹上っただけで、その石垣を崩してしまうだろう」と言った。

サンバラテというのは、その地域の有力者であり、サマリア人の仲間です。ここに、「有力者」とありますが、これは「軍隊」と訳すことができます。そしてアンモン人トビヤがいますが、アンモン人は今のヨルダンの首都アンマンにある国でした。城壁が築き直されていることを聞いて、非常に憤慨しています。神のなされること、神の選ばれたユダヤ人たちのしていることを、その心の頑なさのゆえに非常に嫌っているのです。

彼らの嘲りを、詳しく見てみましょう。第一に、周囲の者たちが嘲っているのは、目で見えるものを見ての結果であります。私たちは、すべての働きを見えないものを見てるようにして、信仰によって進めます。しかし、敵はそれを明らかに見えるものによって貶めようとしています。

第二に、工事をしているのは素人集団です。3章のことを思い出してください、銀細工人や香料作りの人たちがおり、不慣れな工事をしています。「何をやっているんだろうか?」「こんな弱々しい城壁を建てたところで、私たちの攻撃から守られるとでもいうのか。」「狐一匹が上ったら石垣が崩れてしまうだろう」と言っています。いかがでしょうか、私たちも不慣れな仕事をしています。だれもキリスト教会の熟練工などいません。誰もが、「一体、どうやって教会生活を歩むのか?」という戸惑いを覚えながら、聖日にいらしています。

第三に、その嘲りは、「いけにえ」にも向かっています。礼拝をするということが、神を信じていない人々にとっては、「何をやっているんだろうね。そんな益にならないことを。」と思うのです。私たちは絶えず、目に見える成果が礼拝生活には見えないので、目に見える成果を出す世からの誘惑を受けています。しかし真実は、神への礼拝が確立しているからこそ、神の支配の中で目に見える世界を生きることができます。「ロマ 12:1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたさげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」

第四に、「一日で仕上げようというのか。」という言葉も言っていますね。急ピッチで工事は進んでいるのですが、それでも、途方もない時間がかかりそうで、前進しているのかわからないような状態でした。教会の建て上げは、本当に遅々として進まないように見えます。一人一人のキリスト者の成長が、とても遅いのではないかと自分自身を見ると感じます。そこを狙ってくるのです。

最後、第五に、「焼けてしまった石を…、生き返らせようというのか。」という言葉は強烈です。復活の信仰に攻撃をしているのです。私たちは、死んでいたのに甦ったキリストを信じています。廃墟となっているけれども、だからこそそこから神が花を咲かせることができるという信仰を持ちます。けれども、「だめになってしまったものは、ずっとだめなのだ。死んでいるのに生き返らせるなど、できっこしない。」と言っているのです。

2B 復讐を任せる祈り 4-6

4 「お聞きください、私たちの神よ。私たちは軽蔑されています。彼らの侮辱を彼ら自身の頭上に返し、彼らが捕囚の地でかすめ奪われるようにしてください。5 彼らの咎をおおい隠すことなく、彼らの罪を御前から消し去らないでください。彼らが、建て直している者たちを憤慨させたからです。」
6 こうして私たちは城壁を築き直し、城壁はすべて、その半分の高さまでつなぎ合わされた。民に働く気があったからである。

私たちに対して、悪魔が攻撃するのは必ず、「私たちの義」の部分であります。つまり、「あなたは、キリスト者としてなっていない。こんな状態だから、だめなのだ。」と責め立てるのです。そして、私たちが、聖霊による罪の自覚ではなく、人や状況、あるいは心の葛藤などによって、サタンによる罪定め言葉を聞いてしまいます。聖霊によるものか、サタンによるものかは一目瞭然です。私たちが失望させている、落ち込ませている、自分を責め立てている、こういった状況であれば、サタンによるものです。パウロは、ローマ 8 章でこのことを意識して、信仰によって義と認められた者たちの立ち位置を説明しています。「8:31 では、これらのことについて、どのように言えるでしょうか。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」という言葉から始めています。私たちの良心は、私たちが心を尽くして守らないといけないものです。

そこで、4-6 節にて、ネヘミヤは、攻撃的な祈りを捧げました。これは復讐を自分で行なうのではなく、主にお任せする祈りです。詩篇にあるダビデの祈りにも、このようなものはたくさんあります。ダビデが祈る時、それは攻撃的ですが、それゆえに、主ご自身が復讐してくださると安心することができます。まだ状況が改善していなくとも、神の平安によって自分の心が守られるのです。「ローマ 12:19 愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。こう書かれているからです。「復讐はわたしのもの。わたしが報復する。」主はそう言われます。」

この祈りの結果、「こうして私たちは城壁を築き直し」とつながっています。祈りによって、何が守

られたか？と言いますと、心が守られていますね。「民に働く気があったからである。」とあります。「箴 4:23 何を見張るよりも、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれから湧く。」そして、その心に主が思いを与えられ、主の働きが完成されます。「ピリ 2:12-13 こういうわけですから、愛する者たち、あなたがたがいつも従順であったように、私がともにいるときだけでなく、私がいらない今はなおさら従順になり、恐れおののいて自分の救いを達成するよう努めなさい。神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。」

2A 敵の陰謀 7-15

今、「城壁はすべて、その半分の高さまでつなぎ合わされた」と読みました。どんどん、継ぎ合わされていると勢いがあったことでしょう。しかし、そういった時だからこそ、敵の攻撃はさらに熾烈になります。そして、この攻撃が最もきついです。それは「内部」から瓦解させようとするものです。仲間が、敵に惑わされる、あるいは信仰ではなく肉の目で物事を見ってしまうところから、心が疲弊してしまうことです。

1B 祈りによる見張り 7-9

7 サンバラテ、トビヤ、アラブ人、アンモン人、アシュドデ人たちは、エルサレムの城壁の修復がはかどり、割れ目もふさがり始めたことを聞いたとき、激しく怒り、8 皆でエルサレムに攻め入って混乱を起こそうと、陰謀を企てた。

サマリア人サヌバラテとアンモン人トビヤだけでなく、アラブ人も、アシュドデ人も加わっています。サマリアはエルサレムの北、アンモンは東、アラブは南、アシュドデは西です。四方から一気に攻め入ろうと企んでいました。回りが敵に取り囲まれていたのです。四方から一気に攻めるのですが、「陰謀を企てた」とあります。彼らに直接的に戦うのではなく、むしろ互いに混乱を起こして、相対立するように仕向けたのです。

敵は何とかして、私たちの間に、私たちの中に問題があると仕向けます。私たちが問題ではないのに、あたかも私たちの間に問題の原因があるかのように混乱させます。ここで、私たちが血肉の戦いをしているのではないことを気づくことは大切です。「I コリ 14:33 神は混乱の神ではなく、平和の神です。」

9 そこで私たちは、私たちの神に祈り、彼らに備えて昼も夜も見張りを置いた。

再び立つところがどこか？主のところに行くことです。ネヘミヤは、「神に祈」る選択をしました。「ヤコブ 4:7 ですから、神に従い、悪魔に対抗しなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。8a 神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。」そして、祈ることによって、神がネヘミヤに日夜見張りを置く思いを与えられたのです。

2B 内側から来る恐れ 10-15

ところが、敵は執拗です。さらに内部に浸透していきます。

10 ユダの人々は言った。「荷を担ぐ者の力は弱り、瓦礫は山をなしている。城壁を築き直すことなど、私たちにできはしない。」11 私たちの敵は言った。「彼らが気づかないうちに、見つけないうちに、彼らの真ん中に入り込み、彼らを殺して、その工事をやめさせよう。」12 そのため、彼らの近くに住んでいたユダヤ人たちはやって来て、四方八方から十回も私たちに言った。「私たちのところに戻って来てください。」

ついに、ユダヤ人たちの間に敵の陰謀が浸透してしまっていました。一つに、落胆です。「荷を担ぐ者の力は弱り、瓦礫は山をなしている。城壁を築き直すことなど、私たちにできはしない。」と語っています。私たちは目の前に途方もない課題を突き付けられた時に、圧倒されます。神殿の再建の時もそうでしたが、ゼカリヤ書 4 章で主が総督ゼルバベルを励まされました。「ゼカ 4:6-7 彼は私にこう答えた。「これは、ゼルバベルへの【主】のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の【主】は言われる。大いなる山よ、おまえは何者か。おまえはゼルバベルの前で平らにされる。彼がかしら石を運び出せば、『恵みあれ。これに恵みあれ』と叫び声がある。」しかし、今、聖霊の力ではなく人の力に注目してしまったので、意気消沈しています。

一度、このように心に敵の思いが入ってくると、敵はさらに攻撃して、錯乱させます。ここで、「彼らの近くに住んでいたユダヤ人たちはやって来て、四方八方から十回も私たちに言った。「私たちのところに戻って来てください。」」と語っています。敵に最も近いところに住んでいた人々で、最も敵のそそのかしを吹き込まれている人々です。それで、「私たちの生活がこんなに困難なのに、どうして城壁工事などするのですか？」とネヘミヤに要求しているのです。敵はまず、自分に近づいている人々、世に近づいている人々に近づき、そそのかし、そして自分も気づかないうちに、このように、主ご自身ではなく、人間のことに、自分たちのこと、関わりのないことに取り組ませようと錯乱させるのです。そこで指導者ネヘミヤの誘惑は、自分の治めている民のことなのだから、行ってあげなければいけないと思ってしまうことなのです。もしいかなかったら、なんて薄情な！と思われるかもしれません。

そこでネヘミヤは、正しい判断を下しました。13 そこで私は、民をその家族ごとに、城壁のうしろの低い場所の空地に、剣や槍や弓を持たせて配置した。14 私は彼らの様子を見て立ち上がり、有力者たちや代表者たち、およびその他の人たちに言った。「彼らを恐れてはならない。大いなる恐るべき主を覚え、自分たちの兄弟、息子、娘、妻、また家のために戦いなさい。」

第一に、ネヘミヤは、困っているユダヤ人のところに行くのではなく、むしろ彼らを一つ所に集めました。一見、困った人々を助けるのは良いように見えますが、今のような悪い策略もあるのです。

一つのところに集まる、つまり自分自身ではなく、神に目を向けるようにさせたのです。多くの人が自分の必要を訴えますが、主を礼拝することに心を定めていれば、問題は解決されます。

第二に、そして武器を持たせます。これまでは、一部の人たちが見張りをしていたのですが、そうではなく、それぞれが武器を持ちます。指導者だけが武器を持って戦うのだ、ではなく、自分自身が戦う者なのだ、として霊の武器を身に着ける必要があります。教会は、どれだけの人がこの戦いのために武器を取るかどうかで、すべてが変わります。「エペ 6:11 悪魔の策略に対して堅く立つことができるように、神のすべての武具を身に着けなさい。」

第三に恐れの対象を変えさせたことです。それでも、襲われるのではないかと恐れている彼らに対して、激励します。「彼らを恐れてはならない。大いなる恐るべき主を覚え」。人を恐れている時に、人のことを気にしてる時に、実に私たちは神に対して失礼なことをしています。神への恐れを忘れていたのです。イエス様は言われました、「ルカ 12:4-5 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。恐れなければならぬ方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」

第四に、彼らに戦う心を起こさせました。城壁を建てるだけでなく、同時に武器を持たせたのです。ここが大事ですね、私たちは教会を主が建て上げる部分になっているだけでなく、それぞれが主の戦いを戦う者たちになっているのです。問題が起こる時、それが血肉に対するものではなく、霊の勢力に対してのものであることに気づくのです。パウロがこう言いました。「2 コリント 6:7 真理のことばと神の力により、また左右の手にある義の武器によって」「10:4 私たちの戦いの武器は肉のものではなく、神のために要塞を打ち倒す力があるものです。」

私たちは、徹底的に受身になるように教えられてきました。まさか武器をもって、敵に戦うことなどやってはいけないと教えられてきました。今、国の戦争の話をしているのではなく、例えば自分の愛する妻や子どもに不当なことをする人々がいたら、夫あるいは父はどう対処するでしょうか？相手に対峙します。相手が、彼女に手を触れるものなら何が起こっても知らないぞ、という空気、覇気を感じさせるようにします。それが抑止力となり、相手をおじげさせるのです。私たちは、霊的な判断、識別においてこのような積極性、攻撃性が必要です。霊の抑止力、安全保障が必要です。「この人たちに、何か混乱させるようなことがあれば、ただではおかない。」という覇気が必要です。私たちが主によって与えられた愛は、弱い愛ではなく、復活の命に支えられた強い、力ある愛です。

15 私たちの敵が、自分たちの企みが私たちに悟られたこと、神がそれを打ち壊されたことを聞いたとき、私たちはみな城壁に戻り、それぞれ自分の工事に当たった。

そうです、企みであることを悟るところが、勝負所です。企み、敵の攻撃を敵の攻撃だと悟るまでが大変で、それまでは混乱します。注意散漫にさせられます。けれども、主が、それが企みなだと悟らせてくださいます。それで主が打ち壊してくださるのです。こうやって、彼らが戦わずして、敵が去っていきました。これを抑止力と言います。圧倒的な戦う意志によって、かえって相手の意志を喪失させるのです。

3A 目を覚ました工事 16-23

ネヘミヤは、ここで手をゆるめませんでした。いや、むしろこの自衛体制を、城壁の建築のプロジェクトの中に組み込んだのです。

1B 武器携帯の工事 16-20

16 その日以来、私の配下の若い者の半分は工事を続け、もう半分は、槍、盾、弓、よろいで身を固めていた。隊長たちがユダの全家を守った。17 城壁を築く者たち、荷を担いで運ぶ者たちは、片手で仕事をし、片手に投げ槍を握っていた。18 築く者はそれぞれ剣を腰にして築き、角笛を吹き鳴らす者は私のそばにいた。

第一に、若者の半分のみが工事をしています。残りは武装させています。仕事半ばに戦うのではなく、戦うことに専念できる者たちを配置しました。

第二に、工事をしている者たちがその作業をしながら、武器ももたせています。なぜなら、それぞれが散らばって工事をしているからであり、そこで安全を守るにしても、自分たちのことを自分たちで守らないと隙が見えてしまうからです。つまり、皆さん一人一人が、それぞれの場で霊の戦いを戦い、霊的な武装をしないといけません。私たちはそれぞれが、人生に課題を持っています。その現場で戦いの姿勢を取らないといけないのです。

そして、角笛を鳴らすものは、自分のそばに付けています。その理由が次にあります。

19 私は有力者たち、代表者たち、およびそのほかの人々に言った。「この工事は大きく、また範囲は広い。私たちは城壁の上で互いに遠く離れ離れになっている。20 どこでも、角笛が鳴るのを聞いたら、私たちのところに集まって来なさい。私たちの神が私たちのために戦ってくださるのだ。」

敵が攻めてきたら、一丸となって戦わないといけません。その合図が角笛です。何かが起これば角笛を吹かせて、みなが集まることができるようにしました。そして、この戦いは自分たちのものではなく、主が戦ってくださるのだということを再認識します。私たちが相集まるのは、まさに自分たちではなく、主ご自身が戦ってくださることを知るためです。私たちはとすると、自分で自分の

ことを戦わないといけないと思ってしまう。けれども、心を一つにして集まり、主を礼拝する時に、主が自分たちの中で働いて、それでご自分のことを行なわれることを私たちは知ります。集まる時に、私たちは一気に戦うことができます。共に祈れるでしょう。励ましを受けるでしょう。交わって、心が主にあって和むでしょう。聖霊の喜び、平和、義が満ちるのを知るでしょう。主が戦ってくださっているのです。

2B 寝ずの番 21-23

21 こうして私たちはこの工事を進めたが、その半分の者は、夜明けから星が現れるまで槍を手にしていた。22 そのときまた、私は民に言った。「それぞれ自分の配下の若い者と一緒に、エルサレムの内側で夜を明かすようにしなさい。そうすれば、夜には見張りがいて、昼には働くことができる。」23 私も、私の親類の者も、私の配下の若い者たちも、私を守る見張りの人々も、私たちの中のだれも服を脱がず、水場でもそれぞれ投げ槍を持っていた。

ネヘミヤは、夜も寝ずの番を置きました。自分の親戚の者も含めて、えこひいきせずに若者に見張りをさせました。服も脱がせませんでした。目を覚まし、見張っていたのです。私たちが祈るのはこのためです。手を緩めないで祈るのは、このためです。「エペ 6:18 あらゆる祈りと願いによって、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのために、目を覚ましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい。」